

論理的文章

これさえ押さえりや誰でもできる

— 初級編 —

大木裕子

はじめに

超基礎編・基礎編を終えたあなたは、いっばしの論理的文章作成者になっていることと思います。これだけでも立派な社会人として生きていけますが、初級編からはより高みを目指す人向けの内容になります。それは、細部に気を使った文を作る方法です。高みといっても前シリーズに引き続きやはりカンタンですので、どんどん試してみてください。

I. あいまい語を避ける i. 典型的なあいまい語の例

あいまい語、という日本語自体も本来は存在しません。しかし世間一般では、直截的な表現せず、よりぼやかした表現をするのに便利な語をあいまい語といっているようです。ここでは、これをあいまい語の定義として話を進めます。

さて、表現をぼやかす語を一応見てみましょうか。一応？ はい、これですね。「一応」ってなんでしょう。「一応してみる」が表す意味を考えると、「いらないけど、まあ見てみようか」「見たほうが良さそうだから見てみようか」と、いずれも内容を甚だあいまいにしているのがわかります。オマケにどちらの意味かも分かりません。これ以外の意味かも知れません。

「できるだけ」「可能な限り」もあいまい語です。できるという能力を表す語ですから、人によって、ことによって異なります。ですから、どの程度なのか、誰もが分かる指標がないのであいまいなのです。もし報告書で「可能な限りの検証を試みた」などと書いてしまったら大変です。自分では「やるだけやった」という努力の跡を見せたいのかもしれませんが、上司からすれば「これ以上できないと、こちらを牽制しているな」とみられてしまうかもしれません。

そして、たちが悪いのが「一定の」です。硬い表現なので一見論理的に聞こえがちです。「これらを測定し続けた結果、△△は一定の効果があることがわかった」のような文をしばしば見かけます。気づかないと「効果があるのか」と読み流してしまいます。しかし、よく考えると「いったい、どんな効果なんだ？」と正確なことが分かりません。「一定の」は、ある世界の人たちが多用しますね。そう、政治家です。そういわれると、「一定の」が誤魔化すために用いられることがよくある語だということが、感覚的にも分かるのではないのでしょうか。あいまい語は自分では使わないようにしたいですね。そしてそれ以上に、人が使った場合に騙されないようにしなくてはなりません。

I. あいまい語を避ける ii. 副詞や形容詞もあいまい語になり得る

副詞や形容詞も気をつけなければなりません。例えば「AとBの違いは大変大きい」。「大変」(副詞)ってどの程度ですか? 「大きい」(形容詞)ってどのくらいですか? AとBを比較してなんらかの結論にもっていこうとする論法は分かります。しかし、「大変大きい」という表現に留まると、あいまいさを残すだけで具体性や説得力に欠けます。

I. あいまい語を避ける iii. あいまいな表現を避ける方法

あいまい語を避けるには、使わないのが一番です。とくに、「一応」や「できるだけ」のように、会話にも出てくるような語は、徹底的に避けましょう。

さて、すべてのあいまい語は避けられるかというと、それは無理です。とくに、副詞や形容詞は、これらがなくと文を作れなくなることがよくあります。では、あいまい語を使う場合には、何に気をつければいいのでしょうか。

たとえば「一定の」を使う場合をみてみます。先ほどの文を例に用います。

これらを測定し続けた結果、△△は一定の効果があることがわかった。

これだけではダメです。「一定の」がなんなのかが分からないからです。分からない。だからこそ、分かるように文を補えばいいのです。

これらを測定し続けた結果、△△は一定の効果があることがわかった。それは、〇〇をxx%減らす効果である。

これらを測定し続けた結果、△△は〇〇をxx%減らすという一定の効果があることがわかった。

実は、副詞や形容詞もまったく同じ方法であいまい語（正確には、あいまいな表現）を回避することができます。先ほどの文を見てみましょう。

AとBの違いは大変大きい。

「大変」も「大きい」も、どの程度がよくわかりませんでしたから、次のようにすればよいのです。

AとBの違いは大変大きい。Aは10であるのに対しBは100であり、他の2倍や3倍に対し、10倍にもなるのだ。

もうお気づきとは思いますが、あいまい語を使う場合には、あいまいさをなくすような数値などの客観性をもった語を入れればいいのです。とくに、副詞・形容詞を用いる場合には、同類の他の数値と比較することで、その客観性はさらに高まります。

客観性をもたせる語が用いられた文章は、「根拠のある文章」になります。たとえ起承転結が綺麗な文章でも、根も葉もないことを並べ立てられた文章はあまり論理的には見えません。

II. 定義をする i. 定義とは

定義といふとなんだか堅苦しい感じに聞こえますが、数学でも物理学でもないので肩の力を抜いて読んでください。前章のiの冒頭で、実は「定義をする」ということをやっています。文をそのままもってきます。

直截的な表現せず、よりぼやかした表現をするのに便利な語をあいまい語といっているようです。ここでは、これをあいまい語の定義として話を進めます。

文章作成における定義とは、ある言葉の意味を、それ以外の意味に捉えられないように、言葉が示す範囲を限定することをいいます。定義は、辞書に書かれているような厳密なものでも良いですし、その文章のためだけの独自に作った定義でもよいです。重要なのは、定義の内容ではなく、定義しないことで人によって言葉の捉え方が変わってしまわないようにすることなのです。

たとえば、「地盤」という言葉があります。文字通り、地面を構成するものを指す場合もありますし、政治家が使うと活動拠点を指す場合もあります。さらに、地面を構成する「地盤」であっても、地面のいったいどの深さまでなのかを定義しないと、人によって捉え方が変わってしまいます。ちなみに、建築工学的にはだいたい1万年前までに積もった地層を地盤といい、地震学的には6500万年前までの地層を地盤と呼ぶことが多いです（参考文献：『地震と防災』中公新書；2008）。業界によって定義もずいぶん違いますね。

このように、定義は一つではないですし、場合によって変わることもありますし、自分で作ってもよいという、意外と柔軟性の高いものであることがお分かりいただけたと思います。

II. 定義をする ii. 定義の仕方

では、定義は具体的にはどうやってしたらいいのでしょうか。文章を提出する業界が、ある言葉に対して固定的な定義をすでに行っている場合、それに合わせた定義を用いるのが最も望ましいです。こういう状況では、むしろわざわざ定義を明記しない方が良いでしょう。

次に、業界で具体的な定義がまだなされていない語についてです。この場合、その業界でスタンダードになっている内容を定義として使いましょう。その方が、読み手に混乱を与えません。そして最後に、定義がまったくされていない語、自分独自の説を与えたい語がある場合には、定義を自分で作ってしまいましょう。そして文章でその語を使うときには、必ず自分で作った定義に沿った内容にすることを心がけましょう。

ただしどの場合も、文章に登場するすべての語に定義を与える必要はありません。その文章の核となる用語につければよいです。そういう語にだけ絞って定義をすることで、その文章の主題がよりはっきりするというメリットもあります。

Ⅲ. 普通の語なのにあいまい語になる語 i. 言葉に幅がある語

先日、ある製品を取り寄せた際、最初に業者が指定した受取日では対応困難だったため、別日程を指定しました。すると、非常に判断に迷う返事が業者からありました。

20日の送付承知しました。

おわかりでしょうか。「送付」という語です。業者が意味するのは「荷物は20日に業者が発送手配する」ことなのでしょうか。それとも「荷物が20日にこちらに到着するように事前に発送手配する」ことなのでしょうか。日本人は行間を読むのが得意ですから、こちらの要望に対し「承知しました」の言葉があるので、再度問い合わせずになんとか理解することができました。しかし、前後の脈絡がない場合、内容を確定するのは困難です。このように、その一語に時間間隔があったり、距離があったりする場合には、始点または終点を明記しなければなりません。この例ですと、次のようになります。

20日に到着するよう、発送いたします。

III. 普通の語なのにあいまい語になる語 ii. 「より」と「から」

しょっちゅう目にする、いつも気持ち悪いと思う語があります。それは「より」と「から」です。次の文を読んでください。

私は先生より素敵な花束をいただいた。

この文の意味を、どうとりましたか？ おそらく、人によって次の3通りの見解が出るとおもいます。

- a. 私も先生もどちらも花束をもらったが、私の花束は先生の花束に比べて素敵だった
- b. 先生が私に素敵な花束をくれた
- c. 他の人が私に花束をくれたが、その花束以上に先生がくれた花束が素敵だった

「より」を使うと「から」に比べて一見高尚な文に見える。そう思う人が多いのか、つかうべきところではないところで使ってしまう人をよくみかけます。しかし、実は「より」をへたに使うと、このように読み手を混乱させている場合があるのです。もしアナタがbの意味の文章を書きたいのであれば、「より」ではなく「から」を使いましょう。

では、どのような場合に使い分けをするのが良いのでしょうか。一般的には、「より」は比較を表す場合、「から」は起点を表す場合に用いるのがよいです。先の例では、先生がくれたのであれば、先生が起点となるため「先生から」となります。

最後にもう一つ、多くの日本人がやってしまう残念な文をご紹介します。

私よりのお願いです。

多くの人が「私からの」の意味で使っています。つまり、私が起点であるということです。起点なのに「から」ではなく「より」を使っています。さらに、「～より」に「の」を付けた使い方をしてしまうと、「～からの」なのか「～寄りの」なのかがわからなくなる場合があります。これを読んだアナタは今後ぜひ気をつけてください。

「より」と「から」には、明快な線引きがない場合もあります。しかしだからといって考えずに使用するのを控え、「読み手を混乱させないためには、どちらを使った方がいいだろう？」と一度立ち止まってから使うようにしてください。この「読み手を混乱させない」。それが論理的文章でもっとも大事なことです。

論理的文章、これだけ押さえりゃ誰でもできる～初級編～

<http://p.booklog.jp/book/32365>

2011年8月14日 第1版

著者：中小企業診断士 大木裕子 @ MPA

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/rmc/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/32365>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/32365>